

# 保育現場における気になる子への支援

## — トークンエコノミー法を活用した不適応行動の改善 —

### The Effects of the Token Economy on Decreasing Disruptive Behaviors of 3-year-old Boys

仁科綾菜, 遠藤清香

Ayana NISHINA, Sayaka ENDO

#### 概要

本研究では、保育園に通う2歳4ヶ月の男児A児と、3歳の男児B児を対象に、不適応行動の改善におけるトークンエコノミー法の効果を、被験者間多層ベースラインデザインを用いて検証した。A児・B児ともに園では「気になる子」と言われており、集団行動や対人関係においてトラブルが多かった。本研究ではA児は排泄時の不適応行動、B児は支度・片付け時の不適応行動を標的行動とした。用いたトークンは、A児・B児のこだわりを生かしたものとした。A児、B児ともにトークンを使用して支援すると、不適応行動の回数が減少し、排泄や支度・片付けにかかる時間も短縮された。

#### I 研究の目的

障害児保育の分野で「気になる子」という言葉が使われることが増えている。中島・竹尾・谷野(2012)は「気になる子」の特性は、発達障害と診断はされていないが、指示が通りにくい、落ち着きがない、かんしゃく・パニックを起こしやすい、こだわりがあるなどであると述べている。小平・中野(2014)は、気になる子への適切な支援方法の考え方について次の4つを提案している。第1に「その子が困っていることを知る」ことである。第2に「スモールステップで目標を達成していく」ことである。第3に「ほめて意欲を育てる」ことである。第4に「何をしたらよいかを具体的に伝える」ことである。しかし、具体的な支援方法はケースバイケースで、子どもの実態に応じて支援方法を考えていかなければならない。

岡村(2011)の研究では気になる子への支援に対して問題や悩みを抱えている保育者は少なく

い、とされている。実際に気になる子のどのようなことが保育者の悩みや問題になるのだろうか。岡村(2011)によると、保育者が気になる子への対応におわれてしまうことが指摘されている。その結果、気になる子以外の子どもへの対応に手が回らなくなり、それが、保育者の悩みになっている。また、気になる子に対する支援の方法についても保育者はより詳しく知りたいと考えている。

上で述べたとおり、気になる子の特性として、指示が通りにくい、落ち着きがない、かんしゃく・パニックを起こしやすい、こだわりがあるなどがあり、これらの特性が日常の保育生活では、不適応行動となることが多い。鶴(2004)の研究では、行動を改善するには、「行動を自発させ、その結果を達成するという経験を多く持つと、行動は自発されやすくなる」、または「行動を自発させ、その結果が失敗に終わることが多いと、行動は抑制されるようになる」という、子どもと環境の交互作用に働きかける行動の原理を使うことがよい

と述べられている。また、「不適応行動の軽減、望ましい行動の形成やそれを維持するためにも子どもと環境の交互作用に働きかけなければならない」とも述べられている。

不適応行動を改善する方法として、トークンエコノミー法がある。教育や保育の現場でのトークンエコノミー法の実践では、林（2012）や上野・野呂（2011）、半田（2014）などの研究においてその効果が検証されている。トークンエコノミー法とは、約束や指示に従って望ましい行動ができた時にトークンと呼ばれるお金やシールのご褒美を与える方法である。トークンである、お金やシールを貯めると、大きなご褒美と交換できる仕組みとなっている。

本研究では、年少児を対象に、保育現場で見られる不適応行動の改善におけるトークンエコノミー法の効果について検証・考察する。

## II 研究の方法

### (1) 調査対象

本研究はY県X保育園の3歳児クラスに在籍する男児2名（A児、B児）を対象とした。

A児は、2歳4ヶ月の男児で、発達にやや遅れが見られる。特に、教室の中を走り回るなど落ち着きがない姿が見られたり、こだわりが強く活動の切り替えが苦手だったりなどの行動面の課題があった。また、自分の思い通りにいかないと奇声を上げること、興奮して突発的にかんしゃくやパニックを起こす、ブロック遊びやままごと遊びの際にひとり遊びをしているなど気になる面もあり、担任は発達障害ではないかと気にかけていた。また、排泄を嫌がり、「Aくん、先生と一緒にトイレに行くよ。」などと言葉掛けをしながら保育者が手をつないで排泄へ誘っても、手を振り払ってトイレから遠い場所へ走って逃げたり、隠れたりするなど不適応行動を起こしていた。保育者に連れられてトイレの前までは来ることができても、おむつやズボンを下ろそうとすると、床へしゃがみこんでしまったり、かんしゃくやパニックを起こしたりすることもあった。家庭でも排泄の自立はできておらず、研究開始時にはトイレトレーニングを始めたばかりであった。言語の発達に遅れは感じられず、運動面の発達も特に気になるこ

とはなかった。人間関係の面ではひとり遊びが多く、他児とうまくかかわれずトラブルを起こす様子が見られた。車（特に消防車）が好きで、消防車が出てくる本や雑誌を特に気に入っていた。

B児は、3歳の男児で、発達にやや遅れがみられる。遊びや活動に夢中になっているときに保育者に名前を呼ばれても声が耳に入らない、興味があることが見つかるややっている活動を放り出してでも興味のある方へ行くなど過剰な集中と衝動的な行動がみられた。また、突然友だちの上に馬乗りになる、寝ころびながら遊んだり本を読んだりするなどの行動面の課題もあった。自分の思い通りにいかないことがあると奇声をあげる、「今日の給食何かな？」と聞いても、「僕はロボット作るよ」と会話が成立しない、砂遊びやごっこ遊びの最中でもひとり遊びをしていることなど、担任はB児について、発達に遅れがあるのではないかと気にかけていた。登園時や給食、おやつの際の支度、遊びや活動の片づけの際に、やらなければいけないことを途中で放り出して遊びに入ってしまったたり、どこかへ行ってしまったりする不適応行動もみられた。保育者が支度や片づけを促しても、「いやだ。僕は〇〇がしたいの。」と拒否したり、寝ころんだりするなどの不適応行動も起こしていた。家庭でも自分の興味のあることを見つけると、やっていたことを放りだして興味のあるものへ意識が向いていた。言語の発達に遅れは感じられず、運動面の発達も特に気になることはなかった。人間関係の面では、ひとり遊びが多く、友だちの物を壊したり、勝手に取ってしまったりする様子が見られた。乗り物（特に電車）が好きで、「〇〇（電車の名前）に乗って〇〇（駅の名前）行くよ。」や「これ〇〇（電車の名前）だよ。」など電車のことについて話はよくしていた。

なお、本研究への参加について、筆者が研究協力を依頼し、同意を得た。

### (2) 期間と場所

研究の期間はXXXX年5月～10月であった。期間中、週2～5回、著者がX保育園に行き、日常の保育に副担任としてかわりながら研究をおこなった。

研究をおこなったX保育園は0～5歳児の保育をおこなっており、利用児は全体で約60人であっ

た。A児・B児が在籍する3歳児クラスは、園児 担任していた。X保育園の様子、3歳児クラスの 17名（男児6名、女児11名）で、3人の保育士が 保育室の様子を図1・図2に示す。

図1 X保育園の様子

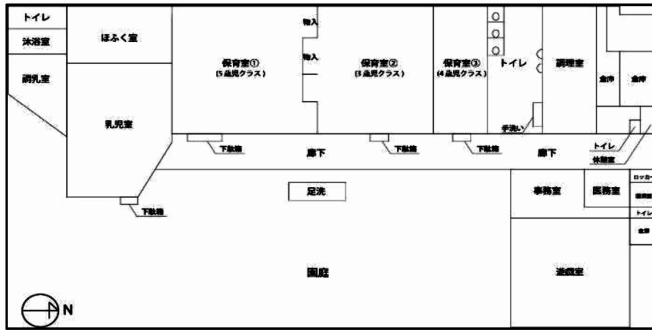
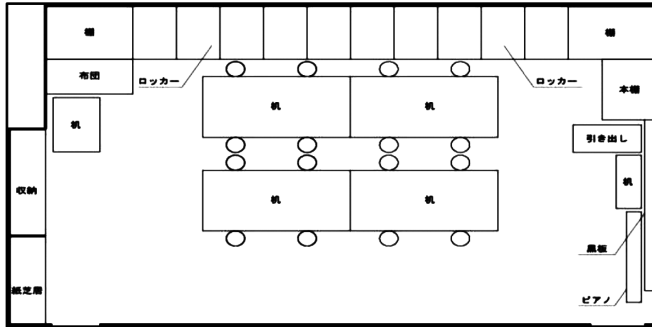


図2 3歳児クラスの保育室の様子



(3) 標的行動

本研究では、A児の排泄時の不適応行動、B児の支度・片付け時の不適応行動を標的行動として、

トークンを用いてそれらの頻度を減少させようと試みた。不適応行動の詳細をA児は表1、B児は表2に示す。

表1 A児の排泄時の不適応行動

不適応行動	不適応行動の具体的内容
息や唾を吐き出す	息を「プープー」して吐き出したり、唾を出したりする。
いたずら	排泄とは関係のないことをする。(給食の準備や鞆、おもちゃをいじる)
隠れる	トイレへ行かずにどこかへ隠れる。
拒否・嫌がり	「トイレ行かない。」や「いやー。」と拒否する。
叫ぶ・奇声	叫んだり、奇声をあげたりする。
砂遊び	砂遊びをする。
座り込む	活動場所やトイレの前で座り込む。
トイレへ入ろうとしない	トイレの前までは行くが、入口で止まってしまう。
泣く	トイレへ行かないと泣く。
寝転び	活動場所やトイレの前で寝転がる。
走る・逃げる	教室や廊下、園庭を走り回ったり逃げたりする。
人に乗る	友だちの上に乗る。
水遊び	水道で水遊びをする。
脱線	教室や活動場所からトイレへ行く導線から外れる。

表2 B児の支度・片付け時の不適応行動

不適応行動	不適応行動の具体的内容
遊び	やらなければいけないことを放り出して遊びだす。(おもちゃで遊ぶや本を読む)
いたずら	支度や片づけに必要なことをする。(キーホルダーや座布団をいじる)
拒否・嫌がり	「いやー。」や「やらない。」と拒否する。
叫ぶ・奇声	叫んだり、奇声を上げたりする。
座り込み	支度や片づけをやらずにその場所に座り込む。
泣く	やりたくないと言いながら泣く。
寝転び	支度や片づけをやらずに寝ころぶ。
走る・逃げる	保育者が一緒にやろうと促しても逃げてどこかへ行く。
部屋から出ていく	支度や片づけをやらずに活動場所の部屋から出ていく。
水遊び	水道で水遊びをする。
脱線	支度や片づけには必要のない導線へ行く。

## (4) トークン

本研究では、A児・B児の不適応行動を減少させるために、トークンエコノミー法を用いた。トークンエコノミー法とは、約束や指示に従って望ましい行動ができた時にトークンと呼ばれるお金やシールのご褒美を与える方法である。トークンである、お金やシールを貯めると、大きなご褒美と交換できる仕組みとなっている。今回は、須藤(2010)が行った保育所における不適応行動の改善の研究をもとに、トークンエコノミー法を実施した。須藤(2010)の研究において、「Charlop-Christy&Haymes(1998)がトークンを設定する際、自閉性障害児に対して丸印や星印のような

トークンを用いるより、それぞれの子どもの『こだわり』をトークンに利用した方が効果的である可能性を示唆している。」と述べられている。そのため、本研究では、A児・B児がともに好きな乗り物のシールをトークンとして使用した。本研究のトークンはまず乗り物の絵をA5画用紙に白黒印刷し台紙とした。次にA5シール用紙にカラー印刷した後6分割し、望ましい行動ができるとそのうち1枚を与えて台紙に貼り、6枚そろると1つの乗り物の絵が完成する(大きなご褒美)というものにした。実際に使用したトークンを図3・図4に、トークンの種類を表3に示す。

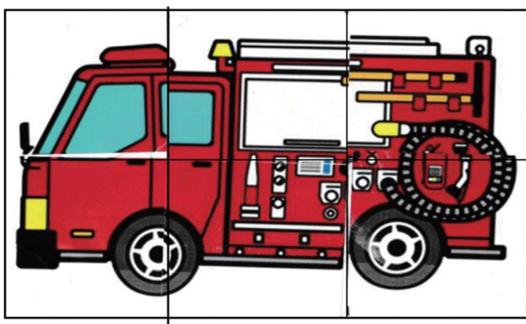


図3 A児のトークンの例(消防車)

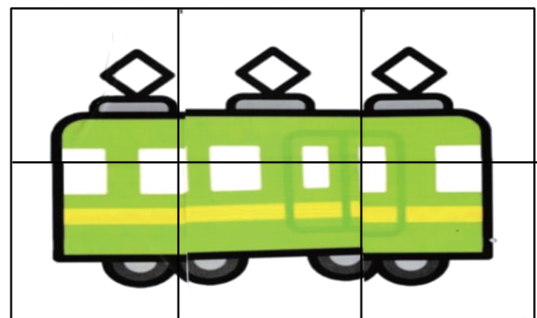


図4 B児のトークンの例(電車)

表3 トークンの種類

トークンの種類					
自動車	バス	消防車	船	ダンブカー	ロケット
バイク	車	飛行機	新幹線	ヨット	トラック
救急車	パトカー	ショベルカー	ヘリコプター	電車	ごみ収集車

## (5) 手続き

## ① A児の排泄時の不適応行動の改善

支援は5クールに分けて行った。各クールの支援方法と内容を以下に示す。

第1クール（ベースライン）

支援を行わない状態で不適応行動の回数と排泄時間を測定した。測定は「トイレへ行くよ。」と声掛けをした時点から開始した。第1クール（ベースライン）・第2クール（壁面装飾）では、測定開始から最初の5分はA児の行動を遠くから見守り、A児自らが排泄へ行くのを待ち、5分経過後に、まだトイレへ行ってなければ、「トイレ行こうね。」ともう一度声掛けをしながら、手をつないだり、抱っこをしたりして、トイレまで行き、衣服の着脱、トイレへ一緒に入るなど、排泄の手伝いをした。

第2クール（壁面装飾）

トイレ環境の改善として、A児の好きな乗り物

を使った壁面の装飾を行った。それ以外は第1クール（ベースライン）と同じ対応をした。村上（2012）の研究でトイレの装飾を子どもの好きなものにしたたり、季節ごとに変えたりすることにより、以前よりもトイレへの興味関心が増えてきたと述べられている。そこで、トイレに興味を持つことができるように壁面の装飾をおこなった。実際に壁面装飾をする前のトイレの様子を図5・図6、壁面装飾後の様子を図7・図8・図9に示す。壁面装飾をする前は、壁やドアに何も貼っていなかったが、壁面装飾として、「汽車に乗って動物たちがお友達のおうちに遊びに行く」というストーリー仕立ての壁面装飾を壁と各トイレの扉にした。

この「壁面装飾」の効果の検証は本研究の目的からは少しはずれる。しかし、保育現場でよく用いられる方法であるため、その効果を確認することにした。

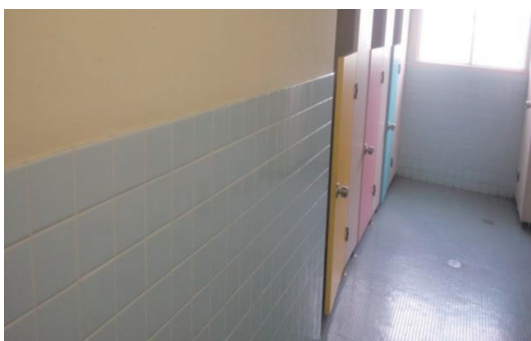


図5 壁面装飾前の壁と扉の様子



図6 壁面装飾前の各個室の様子

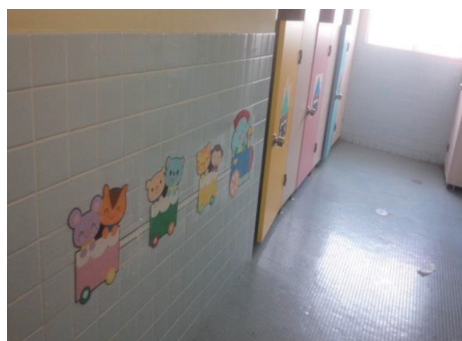


図7 壁面装飾後の壁の様子

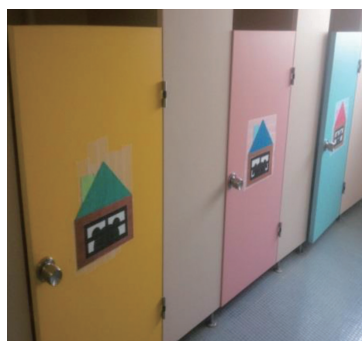


図8 壁面装飾後の扉の様子

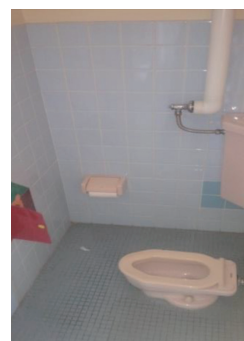


図9 壁面装飾後の各個室の様子

第3ルール（トークン 介助あり）

トークンを用いた支援を開始した。このルールでは、トークンボード（トークンシールを貼るA5画用紙の台紙を挟んだクリップボード）を見せながら「トイレ行くよ。」と声掛けした時点から筆者が100%の身体的介助を行い、トイレまで行き、衣服の着脱、排泄を行った。トークンシールは、トイレが終わった時点で筆者からA児に渡し、A児はシールをトークンボードに自分で貼った。このルールは、筆者が100%の介助を行うため確実にトークンがもらえるルールである。いわば「トークンの練習」期間である。

第4ルール：（トークン 自立）

介助を行わずA児1人で排泄をすることができたらトークンがもらえる。保育者は、保育室でトークンボードを見せながら「トイレ行くよ。」と声掛けをしてからA児がトイレへ行くのを見守り、保育室でA児が帰って来るのを待っている。A児が排泄から戻って来たところでトークンシールを渡し、トークンボードにA児が自分で貼った。

第5ルール：「トークン（一般化）」

第4ルールと同じ条件で、トークンシールを渡す先生を筆者以外の先生にした。

## ② B児の支度と片付けの時の不適応行動の改善

支援はA児とほぼ同様のルールに分けて行った。しかし、B児の場合、支度と片付けが対象のため、第2ルールの壁面装飾を行わなかった。各ルールの支援方法と内容を以下に示す。

第1ルール：（ベースライン）

支援を行わない状態で不適応行動の回数と支度・片づけにかかった時間を測定した。測定は「支度（片付け）するよ。」と声掛けをした時点から開始した。第1ルールでは、測定開始から最初の5分はB児の行動を遠くから見守り、B児自らが支度・片づけをするのを待ち、5分経過後に、支度（片付け）を行っていないければ、「支度（片付け）しようね。」ともう一度声掛けをしながら、支度を一緒にしたり、片づける物を手渡したりして、支

度・片づけの手伝いをした。

第3ルール：（トークン 介助あり）

トークンを用いた支援を開始した。このルールでは、トークンボードを見せながら「支度（片付け）するよ。」と声掛けした時点から筆者が100%の介助を行い、一緒に支度をしたり、片づけをしたりした。不適応行動なく支度・片づけを終えられたら、トークンをもらえることとした。トークンシールは、支度・片づけが終わった時点で筆者からB児に渡し、B児はシールを保育室に置いてあるトークンボードに自分で貼った。このルールは、筆者が100%の介助を行うため確実にトークンがもらえるルールである。いわば「トークンの練習」期間である。

第4ルール：（トークン 自立）

介助を行わずB児1人で支度・片づけをすることができたらトークンがもらえる。保育者はトークンボードを見せながら「支度（片付け）するよ。」と声掛けをしてから、B児が支度・片づけをするのを見守り、B児が支度・片づけを終えるのを待っている。B児が支度・片づけを終えたところで、トークンシールを渡し、トークンボードに自分で貼った。

## (6) 実験デザイン

本研究では被験者間多層ベースラインデザインを用いて、トークンの効果を検証した。ただし結果は、A児・B児を分けて表示した。

### Ⅲ 結果

A児の排泄にかかった時間と不適応行動の回数を図10に示す。横軸は調査日、縦軸1は排泄にかかった時間（単位は秒）、縦軸2は不適応行動の回数（単位は回数）を示す。調査日1日の中で、5回から6回排泄の機会があった。5回から6回の平均をグラフに示した。また、表4にはルールごとの排泄時間の平均と不適応行動の平均を示した。



図10 A児の排泄時にかかった時間と不適応行動の平均

表4 A児の期間ごとの排泄にかかった時間と不適応行動平均

期間	時間平均 (秒)	不適応行動平均 (回数)
第1クール ベースライン	512.9	6.3
第2クール 壁面装飾	572.5	7.4
第3クール トークン (介助あり)	237.4	0.95
第4クール トークン (自立)	273.1	0.8
第5クール トークン (一般化)	143.7	0

1回の排泄に、第1クール（ベースライン）では、時間が約513秒（8分弱）かかり、不適応行動を約6回起こしていた。第1クール（ベースライン）では、自らトイレへ行くことがなかった。トイレへ行くことを嫌がり、ほとんどの排泄は抱っこでトイレの前まで行き、保育士が衣服の着脱などすべて手伝って排泄をしていた。時間や不適応行動の数値が上昇する傾向が見られたため、第2クール（壁面装飾）へ移行した。

第2クール（壁面装飾）では、時間が約573秒（9分弱）かかり、不適応行動を約7回起こしていた。トイレに壁面装飾があることでトイレに興味を示すが、自ら排泄へ行こうとすることはなかった。保育者が抱っこをしてトイレの前まで行き、衣服の着脱を行い、「黄色のトイレには誰がかくれんぼしているのかな？」などの声掛けをすることでトイレへ入って行った。しかし、壁面装飾に興味を示してしまい、第1クール（ベースライン）より時間がかかり、不適応行動の回数も増加してしまった。時間および不適応行動の回数がベースラインより増加してしまったため第3クール（トークン 介助あり）へと移行した。

第3クール（トークン 介助あり）では、時間が約237秒（3分弱）、不適応行動が約1回と第1クール（ベースライン）、第2クール（壁面装飾）と比較してみると時間も短くなり、不適応行動も減少した。第3クール（トークン 介助あり）は、トークンの練習期間で100%の介助を行うため、トークンが確実にもらえることが嬉しいようで、自らトイレへ行く姿も見られ始めた。第3クール（トークン 介助あり）は保育者が100%の介助を行うため時間が大幅に短くなり、不適応行動の回数も減少した。時間および不適応行動の数値が安定したため第4クール（トークン 自立）へと移行した。

第4クール（トークン 自立）では時間が約273秒（4分弱）、不適応行動が約1回と第3クール（トークン 介助あり）のレベルを維持することができた。不適応行動が0回ということもあった。排泄へ行くと「トイレ行って来たよ。」や「おしっこ出た。」などと筆者に知らせに来てトークンを受け取っていた。トークンボードの絵を見て、「あとこことここで新幹線完成だね。」などと言うこともあった。

第4クール（トークン 自立）初日では支援方法が変わったことに戸惑いを感じたのか時間、不適応行動が増したが、その後は安定していった。第4クール（トークン 自立）も安定したため、第5クール（トークン 一般化）へと移行した。

第5クール（トークン 一般化）では、時間が144秒（2分弱）、不適応行動が0回と、ほぼ一人で排泄へ行けるようになった。排泄へ行くと、自らトークンボードを持って、「トイレ行ったよ。ここに貼る。」とトークンを渡す保育者の所へ行ったり、「今日は〇〇（トークンで作っている乗り物の名前）だよ。ここに貼ったよ。」と筆者の所へ見せに來たりしていた。

以上のことからA児において不適応行動の改善にトークンの効果があったことがわかる。

B児の支度・片づけにかかった時間と不適応行動の回数を図11に示す。横軸は調査日、縦軸1は支度・片づけにかかった時間（単位は秒）、縦軸2は不適応行動の回数（単位は回数）を示す。調査日1日の中で、3回から5回支度と片づけの機会があった。3回から5回の平均をグラフに示してある。また、表5にはクールごとの排泄時間の平均と不適応行動の平均を示した。



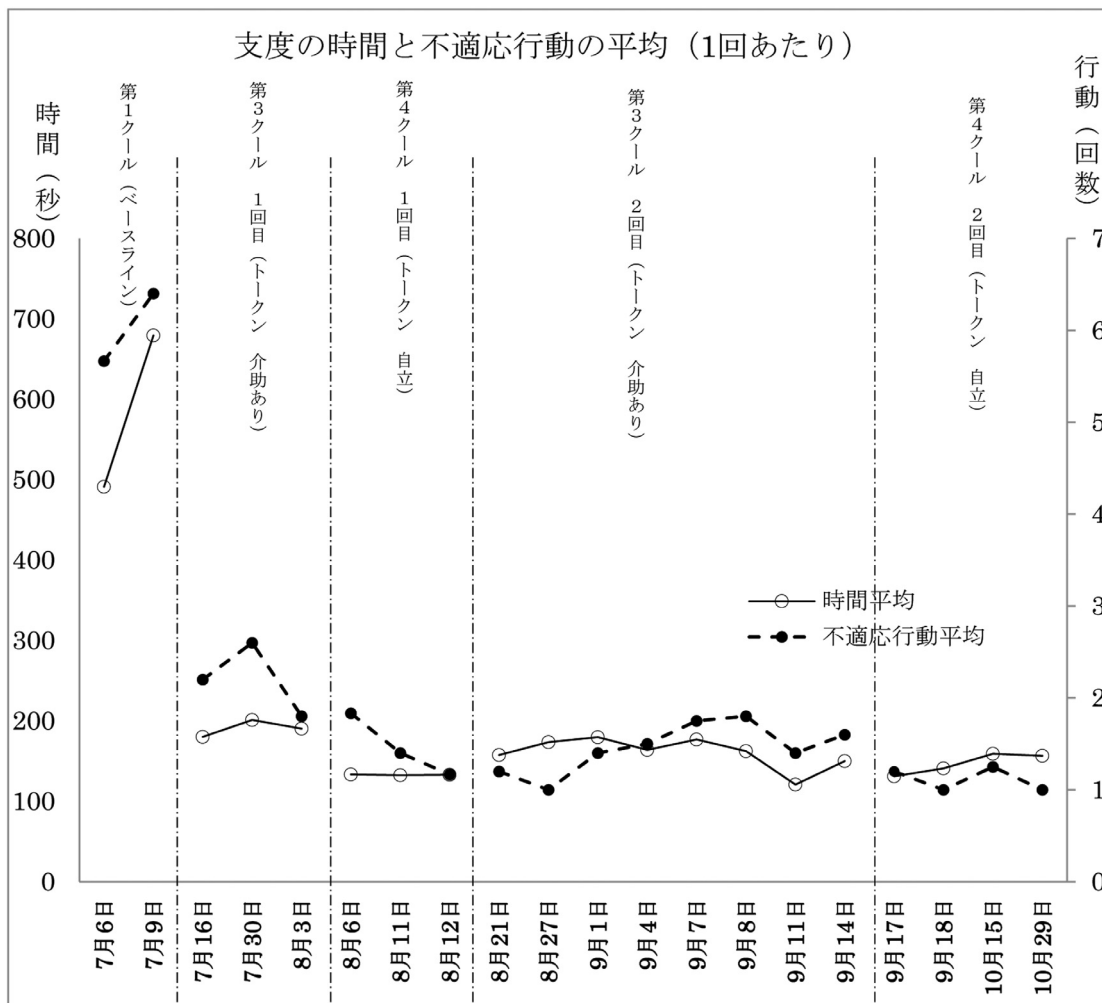


図11 B児の支度・片づけにかかった時間と不適應行動の平均

表5 B児の期間ごとの支度・片づけにかかった時間と不適應行動

期間	時間平均 (秒)	不適應行動平均 (回数)
第1クール ベースライン	585.2	6
第3クール (1回目) トークン (介助あり)	190.6	2.2
第4クール (1回目) トークン (自立)	132.9	1.5
第3クール (2回目) トークン (介助あり)	160.6	1.5
第4クール (2回目) トークン (自立)	146.9	1.2

1回の支度・片づけに、第1クール（ベースライン）では、時間が約525秒（9分弱）かかり、不適応行動を約6回起こしていた。また、支度・片づけをする際に保育者が手伝わなければ進まず、遊んだり、寝ころんだりするなどの不適応行動を起こしていた。時間と不適応行動の数値に上昇傾向にあったため第3クール（トークン 介助あり）へと移行した。

第3クール（トークン 介助あり）では、時間が約191秒（3分弱）、不適応行動が約2回と第1クール（ベースライン）と比較してみると時間も不適応行動も減少した。第3クール（トークン 介助あり）は、トークンの練習期間として100%の介助を行うため、トークンが確実にもらえるのが嬉しいようで、支度・片づけを頑張っている。時間および不適応行動の数値が安定したため、第4クール（トークン 自立）へと移行した。

第4クール（トークン 自立）では時間が約133秒（2分弱）、不適応行動が約1回と第3クール（トークン 介助あり）のレベルを維持することができた。しかし、気持ちの切り替えができないこともあり、トークンがもらえないことがあると泣いたり、奇声をあげたりすることがあった。そのため、第3クール（トークン 介助あり）へ戻り、トークンが確実にもらえる練習をすることにした。

2回目の第3クール（トークン 介助あり）では、時間が約161秒（2分弱）、不適応行動が1回であった。時間および不適応行動の数値が安定したため、第4クールの2回目（トークン 自立）へと移行した。

2回目の第4クール（トークン 自立）では、時間が約147秒（約2分弱）、不適応行動が約1回と低いレベルを維持することができた。トークンボードを見せて「支度・片づけをするよ。」と声をかけるだけで、自分で支度や片づけを行うことができるようになった。また、シールがもらえないことがあっても泣かずに、「次頑張るやろね。」と声をかけると、次の支度・片づけの時に「シール貼るからやる。」と言いながら行動していた。

以上のことからB児においても不適応行動の改善にトークンの効果があったことがわかる。

## IV 考察

本研究では被験者間多層ベースラインデザインで、2歳4ヶ月のA児と、3歳の男児B児を対象に、不適応行動の改善におけるトークンエコノミー法の効果を検証した。A児は排泄時の不適応行動、B児は支度・片付け時の不適応行動を標的行動とした。A児、B児ともにトークンを使用して支援すると、時間が短縮され、不適応行動の回数も減少したことから、行動改善において、トークンの効果があったと考えられる。

A児、B児、それぞれの様子について考察していきたい。

A児の第2クール（壁面装飾）では、壁面装飾に興味を示し第1クール（ベースライン）より時間がかかってしまった。しかし、トイレという環境に対しては、興味を持つきっかけになったと考えられる。第3クール（トークン 介助あり）においては、「ここにシール貼るから行って来る。」と言いながらトイレ行く姿などから、トークンが排泄に対する『ご褒美』となっただけでなく、排泄行動を生起するきっかけになったとも考えられる。第4クール（トークン 自立）においては、A児の「トイレ行ってきたよ。」や「おしっこでた。」などの発言が見られ、自ら排泄へ行っていた。第5クール（トークン 一般化）においては、筆者以外の保育者がトークンを渡しても変わらずに、自ら排泄へ行っていた。

次にB児を考察していきたい。B児の第3クール（トークン 介助あり）での「今日は救急車」と言いながら支度、片付けをしていた姿から、トークンがあることで支度・片付けをするきっかけになったと考えられる。第4クール（トークン 自立）においては、声掛けをするだけで自ら支度、片付けをすることができた。B児においては、トークンがもらえないと、泣いたり、叫ぶ・奇声の行動をしたりしたため、一度、前のクールに戻るといったことが第4クール（トークン 自立）の時にあった。1回目の第3クール（トークン 介助あり）のとき、不適応行動が十分に減らないうちに、次のクールである第4クール（トークン 自立）に移行してしまっただけのため、自立がうまくいかなかったのではないだろうか考える。第3クール（ト

クン 介助あり)に戻り、期間を長めに設定し、不適応行動が減ってきたところで、次のクールである第4クール(トークン 自立)へと移行すると、今度は安定した行動改善が見られた。うまくいかなかった場合は、一度前のクールに戻り支援していくことで、不適応行動の改善ができたのではないかと考える。

トークンエコノミー法を実践してみて、筆者以外の3歳児クラスの担任は、A児が「スムーズにトイレ行くようになりよかった。」やB児の支度、片付け時の行動が改善されたことで「日常生活がスムーズになった。」などと報告してくれた。また、A児、B児ともに園で日常生活がしやすくなり、クラス活動にもスムーズに参加できるようになり、クラスの友だちとコミュニケーションが取れるようになったとも言っていた。また、担任からはA児、B児ともにマンツーマンでかわらなければならぬ時間が減少したとの感想も聞かれた。

本研究ではトークンエコノミー法の不適応行動の改善に対する効果が見られたが、今後検討したい課題もある。

まず研究の方法については、複数担任の場合であれば、対象児にマンツーマンで関わりながら支援することができるが、1人担任の場合に対象児にマンツーマンで関わりながら支援することが難しくなる。そのため、1人担任の場合は使用するトークンを工夫することが必要になるかもしれない。

次に、トークンエコノミー法をクラスで用いる場合の、周りの子どもへの影響についても明らかにしたい。今回の研究では、A児・B児のクラスメイトは、トークンを使っている二人に対して、応援する様子を見せていた。トークンボードを二人に渡したり、二人が標的行動をうまく達成したときに筆者に「Aくん、できたよ。シールあげて。」と言ってきたりすることがあった。今回は周りの子どもがとても協力的であったが、場合によってはそうでないこともあるのだろうか。トークンエコノミー法導入時の周りの子どもたちの様子についても研究していきたい。

最後に今回は3歳児の気になる子を対象にしてトークンエコノミー法を実践した。3歳児以外の

年齢で同じようにトークンエコノミー法を使用した支援を行うことで不適応行動の改善をすることができるか、どのようなトークンが有効なのかなども研究していきたい。

#### 引用・参考文献

半田健 2014 「発達障害児へのセルフモニタリングを取り入れた社会的スキル訓練—短期維持効果の検討—」 行動療法研究 40(3),177-187

林幹士 2012 「学童保育所における発達障害のある子どもへの降所支援—応用行動分析学の技法を取り入れた飛行機ごっこ遊びを用いて—」 日本学童保育学会紀要 2,49-57

小平雅基・中野圭子 2014 気になる子のために保育者ができる特別支援 学研

村上智子 2012 「保育園における幼児の排泄自立とトイレ環境・排泄援助の影響」東北文科大学・東北文科大学短期大学部紀要(2),25-40

中島正夫・竹尾晃子・谷野亜美 2012 「保育所に通う発達障害を持つ子ども・「気になる子」の状況について」椋山女子学園大学教育学部紀要(5),69-80

岡村裕子 2011 「保育者から見た「気になる子」についての調査研究」 滋賀大学大学院教育学研究科論文集,14,37-48

須藤那彦 2010 「自閉症障害児におけるトークン・エコノミー法による援助行動の獲得と一般化—家庭や学校場面への連鎖を達成する随伴性の整備—」 特殊教育研究, 48(3), 211-223

鶴宏史 2004 「統合保育における応用分析学の適用—不適応行動の改善事例—」 神戸親和女子大学児童教育学研究23,49-60

上野茜・野呂文行 2011 「機能的アセスメントに基づく自閉性障害児に対するよー君システムを用いた家庭内支援に関する検討」 障害科学研究,35,197-208

